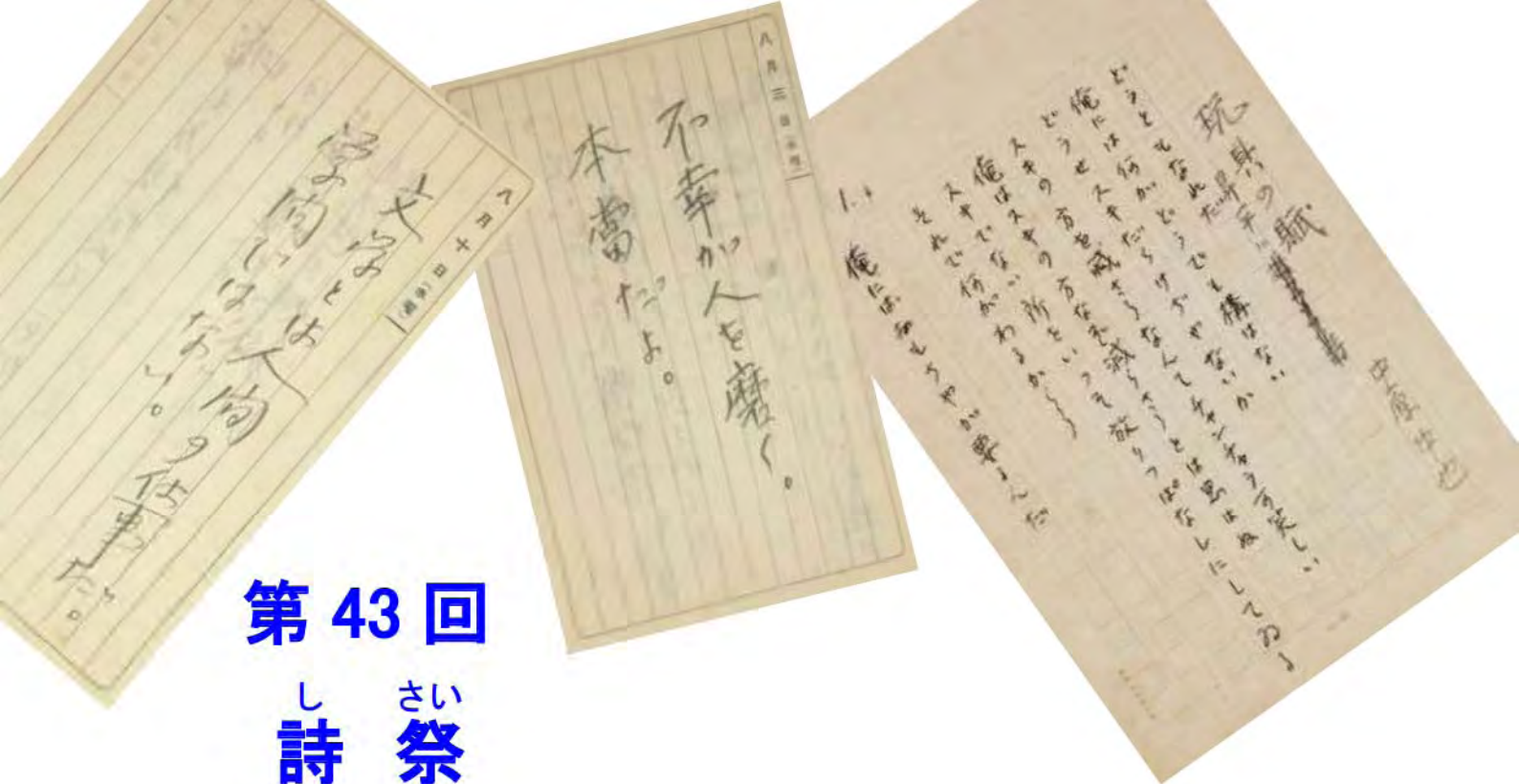




第 43 回

し さい 詩 祭

講演と朗読のつどい

第 61 回福島県芸術祭主催行事

(公財)福島県文化振興財団助成事業

日時 令和4年(2022年)11月6日(日) 13:30~16:30

会場 福島県立図書館 講堂 (福島市森合字西養山 1)

講演 太田治子氏 (作家、エッセイスト)

演題 心に届く「詩」のことば

詩の朗読 福島県現代詩人会会員作品の朗読

主催 福島県現代詩人会

福島県 福島県教育委員会

福島県芸術文化団体連合会

後援 福島市 福島市教育委員会 福島大学

福島民報社 福島民友新聞社 NHK 福島放送局

福島テレビ 福島中央テレビ 福島放送 テレビユー福島



画像提供: 中原中也記念館

プログラム

司会進行 渡辺 孝行 (福島県現代詩人会 事務局長)
あべ 和かこ (同会 理事 詩祭実行委員長)
齋藤 貢 (同会 会長)

13:30 開会のことば

会長挨拶と講師紹介

13:45 講演 心に届く「詩」のことば 太田 治子 氏 (作家、エッセイスト)

中原中也を基軸としながら、心に届く「詩」とは何なのか、
詩を書くことで、自分と「心」の関係がどう変わるのか。

15:00 -----休憩-----

アトラクション シャンソン歌唱 神尾 ミエ 氏

15:20 福島県現代詩人会 会員作品朗読

ご案内 松坂 佳生 (同会 理事)

コロナ禍で詩祭が開催できなかった2年間に、逝去された会員5名の作品を朗読する。

太田隆夫 作	「虹の架かったそのまた向こう」	朗読	みうらひろこ (相双地区)
内池和子 作	「滝桜 あなたへ」	朗読	鈴木淑子 (県北地区)
若松丈太郎 作	「ひとのあかし」「飯崎の桜」	朗読	高橋美加子 (相双地区)
根本昌幸 作	「チンと音がして」「命あるうちに」	朗読	丹治計二 (県北地区)
室井大和 作	「ラスト・メッセージ」	朗読	添田恒夫 (県中地区)

15:50 現代詩人会と新刊詩集紹介

岩田 武昭 (同会 理事長)

16:00 閉会の言葉

二階堂晃子 (同会 理事)



NHK テキスト 100分de名著 中原中也詩集

中原中也生誕 110 年を迎えた 2017 年に、NHK で放映されたテレビ番組のテキストです。太田治子さんを講師に、彼の詩に新しい角度から光を当てながら、「詩のことば」の深い意味を読み解き、私たち現代人にとって「詩」がどんな意味をもつのか、「詩」を味わうとはどういうことなのかを浮き彫りにした番組で、現在でもNHKオンデマンドで視聴できます。

番組の第1回目で、司会の伊集院光さんがこう言います。

「全員にとって、オーダーメイドになるすごさを詩は持っている」と。

また、伊集院さんは「詩は自由な解釈でいいんですか？ 正解の読み方があって自分の感覚が間違いだったらどうしようと思ってしまう」とも。

太田治子さんがこの問いに、こう答えます。

「詩は自由な精神で書くから、読み手も自由でいい」と。

発売日 2016 年 12 月 23 日 NHK 出版

価格 定価:576 円(税込み) ISBN978-4-14-223070-9

(書店への注文、または NHK 出版やネット通販で購入できます)

講師紹介



おお た はる こ
太 田 治 子 氏

神奈川県生まれ

1986 年『心映えの記』で

第 1 回坪田譲治文学賞受賞

1976～79 年、NHK テレビ

『日曜美術館』司会アシスタント

2017 年 NHK テレビ『100 分 de 名著 中原中也詩集』講師

主な著書

『母の万年筆』『明るい方へ——父・太宰治と母・太田静子』

『万里子とわたしの美術館』『万里子の色鉛筆』『恋する手』

『石の花——林芙美子の真実』『時こそ今は』

【メモ】

朗読作品 <福島県現代詩人会 会員作品>

太田 隆夫

朗読 みうらひろこ

虹の架かるそのまた向う

あざやかな緑色や青緑の色が全てを染めている

具象としての濃い色彩の山壁やまひだを通りぬけ

峠の長いトンネルを潜ってこちら側に出た
すとはるか向うの見慣れた山の上に

くつきりと明るく虹が架かっているのが見えた

その虹は いつも弧を描いているのではなく
ならんでいる山の頂きを横につなぐように

ほがらかな気象にまかせて棚引いていて変だ
それも下方に輝く紫色の位置が

ほかの六つの色よりも透明度が濃くみえる
わたくしには初めて体験した虹の輝きだった

虹が浮かんでいるあの山のあたりは 多分に
走り時雨と思われるが 陽が当たっている

その実像に結びつく 遙か遠くの空の下では

いまも空爆しょうえんの硝煙と埃の舞う渦のなかに

あこがれの虹が架かることなど滅多にないだろう

ここでは小鳥の群れが朝陽のなかさえずにじめるが

アフガン・シリアの小動物たちはどうしているか

ここでは青葉が雲を湧かせるほど色彩が豊かだが

アフガン・シリアの子どもたちの瞳は夕陽を浴びて眩しいだろうか

わたくしは平凡に虹の変容を見つめていたが

或いはこの虹だって本当は幻影かも知れない

例えば アフガン・シリアの地からの戦乱の悲痛な信号が

虹の光彩に乗ってその硝煙の空から届いたのでないか

だから弧を描かないで 横に棚引いた形なのかも知れない

詩誌「卓」通巻67号より

朗読作品 <福島県現代詩人会 会員作品>

内池 和子

朗読 鈴木淑子

滝桜 あなたへ

年に一度 あなたに会いに行く
千年の時を生きたあなたに
二十年前の 出合いの時の驚きを また新しくするために

その朝 そこは小さな丘に囲まれた すり鉢形の南斜面の畑の中
野道を上って行った私の前に
あなたは 巨大な姥神のお姿で立ち現れた

樹の高さ十三米あまり
うつそりと 花の影が影を生み
薄藤色 否 薄墨色の 長い長い髪を ゆつさり垂らし
あなたは ものみな抱きとるかのように 両手をひろげ
妖気漂う お姿であった

千の季節の移ろいに 身を任せ
大地とともに その身体すべてで養った 虫・鳥・けものたち
幾多の生きものの生と死を見つめ
争わず 競わず ただ そこに 在っていることの 気品

と 真向いの丘に陽が昇り 一瞬にして
あなたの頂きは鮮やかな淡紅色にかがやき
たちまち 身にまとう滝の花衣
なんという華やぎ

おもわず歩み寄り
その黒々とした幹をまかくす 地に延びた花枝の先を見
ひんやりとやわらかな花びらから伝わる
すこやかな 命の水脈に 手をふれ 千年の時に畏怖した

あの出合いの朝の 至福のひとつとき 忘れがたく
年に一度 花開く朝 こころを預け あなたに会いに行く

詩集「漂流する秋」より

朗読作品 <福島県現代詩人会 会員作品>

若松 丈太郎

朗読 高橋美加子

ひとのあかし

ひとは作物を栽培することを覚えた
ひとは生きものを飼育することを覚えた
作物の栽培も
生きものの飼育も
ひとがひとであることのあかしだ

あるとき以後
耕作地があるのに作物を栽培できない
家畜がいるのに飼育できない
魚がいるのに漁ができない
ということになったら

ひとはひとであるとは言えない
のではないか

詩集『ひとのあかし』2012年 より

若松 丈太郎

朗読 高橋美加子

飯崎の桜
はんさき

いつもの年なら
人びとの目をなぐさめ楽しませる
樹齢三百年のべにしだれ桜は
愛でる人なしにことしは散った

丘のうえの小さな墓地の中央
傘状に枝をひろげて墓地を包んで
夕陽をうけて妖しい色に染まる
死者のために咲くべにしだれ桜

丘からはるかに海が望める
津波が襲った海岸からは
妖しく咲くべにしだれ桜が見えるだろう

死者をなぐさめるためにのみ咲いて
核災で立ち入りが禁じられ
無人となった丘のうえで咲いて

『いのちの籠』第19号・2011年 より

朗読作品 <福島県現代詩人会 会員作品>

根本 昌幸

朗読 丹治計二

チンと音がして

夜、酒を呑む。

毎日呑む。

寒い夜はレンジで

チンという音がして

熱爛の出来上がり。

酒の肴もレンジで作る。

チンと音がして

出来上がる。

チン

チンチン

そういえばおれにもチンはある。

すっかり忘れていたよ。

チンチンのことを――

元気かよ。

元気なんてとうの昔に

山の彼方へとんでいったよ。

それで今はどうしている。

どうもこうも

だらりとしたまんま

眠ってばかりいるよ。

根本 昌幸

朗読 丹治計二

命のあるうちに

私が生まれる前に

私には六歳の

姉がいたという。

その姉が六歳で

亡くなった後に

私が生まれたという。

戦争が終わった

後のことだ。

私には戦後に生まれたということ

戦争の記憶はない。

私の姉は こわい こわいと

くり返し言って

亡くなったという。

暑い暑い日に

ミンミンゼミが

鳴いていたという。

そのことを母はよく私に言った。

父は何とも言わなかった。

それは時代を思ってたことだった。
と思うが。

この地球上から

戦争が終わった訳ではない。

どこかの国で

戦争は今も続いている。

馬鹿なことをするものよ。

愚かなことをするものよ。

人間というものは。

いや動物や

植物の世界も

そうなのだけれど。

人間も動物も植物も

生きている。

時代を。

長いようで

短い時代を。

考えよ。

命あるうちに。

一生一度。

みんな一生一度だけだ。

朗読作品 <福島県現代詩人会 会員作品>

室井 大和

朗読 添田恒夫

ラスト・メッセージ

外はみぞれ

内は笑顔

まだ進路先が決まっていない
娘よ。

「フレーフレー オネエ。」と言って

右手をあやつり人形の操者のように
細い腕を上下にぶらぶらさせている

お母さん。

左手に点滴台を持って

生きている

お母さん。

家族が揃った病院内の廊下は

笑顔があった

娘よ。

「あなたは、そろっかしいサザエさんだから、

足元を見て、生きて行くんだよ。」

これが お母さんのラスト・メッセージ。

一九九四年一月三日から書かれている

小さな手帳の折目の染みは

お母さんが流した涙の数

家族一人一人に宛てた手紙

一枚一枚丹念にたたんだ

祈りの象形文字

心残りはお母さんと添寝をした最後の人

「お姉ちゃん。」

「あなたの花嫁姿を見たかった」と。

あさちや
朝靄が煙る寒い春の朝

麻酔が切れた

お母さんは魔物になった

どんなに痛かったのだろう

どんなに苦しかったのだろう。

やがて

引き潮が曳くように

五十路の人生を閉じた

お母さん。

凜としてお茶を立てた

野の花を添えるのが好きだった

侘び寂びの境地を見付けたかった

お母さん。

「お姉ちゃん。」

「あなたは、そろっかしいサザエさんだから、

足元を見て、生きて行くんだよ。」

これが お母さんから あなたへのラスト・メッセージ

詩集『花筏』はないかた 2007年 より



夷俘の叛逆
若松丈太郎詩集
2021年3月 発行
コールサック社
ISBN-10 : 4864354731
1,650 円(税込み)

紹介文
前田 新
福島県現代詩人会
会津地区

昭和十年生まれの若松さんと私は同世代で「教科書の墨塗り」を若松さんは小学校の四年、私は二年のときに体験している。私は二回は敗戦による価値観の大転換のなかで、権威とよばれるものの虚妄を目の当たりにし、新憲法のもとで自我形成をし、歴史観を培った。その歴史観を私たちは共有した。詩集『夷俘の叛逆』は、五章に四十二編の詩が収録されているが、第二章は詩集の表題となった「夷俘の叛逆」をはじめ、四篇の詩が括られ、ここに若松さんの詩と思想の原核が集約される。古代東北において蝦夷と呼ばれた私たちの祖は「夷俘」(逃げられないようにに囲いのなかに置かれた四人)とされた。蝦夷の大領伊治公皆麻呂は、ヤマトの権力者に抵抗して勝利した「宝亀の乱」を主題としたこの詩は、若松さんの出生の地(岩手県奥州市)での歴史である。詩は「史書に記名されることなく、記憶の彼方に消えた蝦夷は数知れない」と結ばれる。

次の詩「土人からヤマトへもの申す」は現代の沖縄の現実を、詩「こころのゆたかさ」は、「わたしたちのあとの時代がある」として、あとの時代に遺すことに誇れるものを、わたしたちは創造しているのだろうか」と自問し、縄文への回帰にこころのゆたかさを見る。詩「三千年未来へのメッセージ」は、核災によって奪われた人々の暮らしを取り戻すことが出来るかを問い、「?」で結んでいる。紙数の都合で第二章からは子細に立ち入らないが、第一章の総論に對して第二章から第五章までは各論として詩集は構成される。ちなみに第二章は自由民権家植木枝盛ほか九名の夷俘の末裔の反逆を主題とし、第三章は3・11の核災の現実を時間の経過のなかで凝視し、事故から三十三年が過ぎたチエルノブイリを重ねる。第四章は自己の思想形成を回顧して、憲法九条の立場に立ち、反戦平和の思いを積極的非暴力平和主義の理念として貫く決意が謳われる。第五章は自らを含めた「ひと」について語り、詩「ひとにはことばがある」で、ことばにひとの未来への希望を託す。そして最後の詩「これからなにをするの?」は、言うまでもなく、私たち詩人に対する若松さんの問いかけ、遺文である。



言葉の花束
大山いづみ詩集
2021年8月 発行
純和屋
junwaya3110@gmail.com
私家版 1,100 円
(税込み)

紹介文
佐藤 公子
福島県現代詩人会
県北地区

大山さんをお見かけしたのは、第二回福島県現代詩集賞の受賞者として、表彰された時でした。作品は「命の音」。命を音で表現することなど考えたことも無かった私には、新鮮な表現でした。無数の命の音は、せつなく、せわしい音。「チツチツチツ、チチチツ」こんな風に迫ってくる命の音、私の心もざわついた、オノマトペの使い方は、心に残る一遍でした。震災その後の原発の爆発で、助かったはずの人々の無念さ、哀しみが的確な言葉で表現されていると感じました。言葉の花束は「命の音」も含め、全四章で構成されています。副題には「気づくと人生の半分が過ぎてしまった。閉じられたままの扉を解き放つ」。裏表紙には、「走り回るのは明るい私と、哀しみを抱いた自分」と書かれています。

副題のとおり、言葉の花束は、「子供の中の私は現実的な中でも非現実的な中でよく迷子になる時があった」と自分の感じ方と世間の感じ方の違いを感じて大人になった心の葛藤。そして「今だから出て来てくれた涙」「まだ本当のことを書いていない」「自分の真心は、本当はとっても大事なものであったと気づき、今はといえれば拾い集めて探している」と自分が自分で在しても良いのだとの肯定。肯定したことによって「言葉が流れ出してくる」「誰のものでもない」「自分だけの言葉」と記している。詩の形態は、横書きです。横書きでなければ、書けなかった「自分の真心」、思いをくつきりさせることは、自分との葛藤でもあると思います。その葛藤を振り切るためにあえて横書きなのでしょう。現在は、詩の形態も、手紙も、SNSやメールで発信される時代です。全てのページを読み終えると、永瀬清子の『短章集 続』の言葉と同じ思いが、深く感じられました。本書では、詩をなぜ書くのかは、「それは『思い』をくつきりさせたいからだ。自分をみつけ自分の流れを流したいからだ。月の引力で、時々自分自身の不平不満が膨れ上がってくる、そのためだ」と書かれています。私たちが、詩を書く時、自分は何者だと思ふとき、「ことばの花束」を開いてみると、きつと、自分のこころの在りかを探し出せるかもわかりません。そして底深く眠らせていた自分と対峙し、新たな自分と巡り会えるかもわかりません。

私たちはこの詩集で読むのは、いわば読者に向けられた「やさしい言葉」ではない。良い意味で、読後に私たちは裏切られる。「やさしい言葉」とは、老いて歩くことが困難になった「夫」と「私」との間に存在するものであり、「私」が喜びを分かち合う相手である。少しだけ歩くことができた「夫」が、それをうれしそうに「私」に話す——「私」はその喜びを「夫」ではなく「やさしい言葉」と共有するのだ。

詩集は全三章の構成になっており、「Ⅰ 私を呼ぶ声」「Ⅱ 入居まで」「Ⅲ 老いの日々」とそれぞれの章を進み、詩の言葉を読んでいくうちに、「私」が介護する「夫」の状態が「私」には望ましくない方向に変化していく様子がわかる。そこには絶望とか落胆とか諦観といった分かりやすいメーターで測られた心情ではなく、忘れることと思ひ出すことが同時に成立するような時間の流れに身を委ねようとする「私」が描かれている。

最終章「老いの日々」は、すべての詩の題名が名詞一字で付けられている。第一章は、接続詞がタイトルに付された「たとえば」という詩が象徴しているように、本文に「だろう」という推量の助動詞が多用されていることから、「私」が現在を軸にしつつ時間や空間を超えて未来に対して思考を巡らせていることが読み取れる。しかしそうした「私」の思考は「夫」の「おい」という声によつて遮られる。「夫」が「私」を呼ぶ声が、「私」の思考を切断し、それはついに最終章において名詞一字のタイトルという、それ以上の文節に分けられない自立語として詩に表れていく。しかしそれは同時に、単独でも文節を構成できる「私」に変化したといつてもよい。「夫」が「施設」に入つたことで一人になった「私」は、「やさしい言葉」を思い出すことを「誓」う——最終章は名詞が並列されて語られる「誓」という詩で閉じられている。

表紙の挿絵も含めて、言葉一つ一つの感触を指先で確かめながら読みたい詩集だ。



やさしい言葉
福西トモ子詩集
2021年11月 発刊
土曜美術社出版販売
ISBN-10:4812026504
2,200 円(税込み)

紹介文
片岡 真琴
福島県現代詩人会
会津地区

この詩集は、07年から18年までの5冊の詩集全編を収めたものです。作者の内面に存在するのは、学生時代からサークルに参加されていた「文学への思い」です。私も教職に就き文芸部顧問だったことから、多分同じような道を歩いていた人間であり、かつての詩人会が醸していた熱さを手繰り寄せたのでした。炎のように立ち上るものを見ていたような青春が、普遍的に果てなく誰にも生きる源泉なのだと思います。年譜も記された丁寧なご本作りに、「精一杯やりました」という北京五輪の羽生結弦哲学の言葉が重なりました。講演会や詩人との出会いもほとんど同じですので、身近に読ませて頂きました。県内各地区の詩祭に参加した日の記憶を共有する方々がいることは、詩人会々員お互いの絆に思います。

詩集の構成は、07年『花筏』、10年『残照』、13年『迎え火』、16年『夜明け』、18年『雪ほたる』、未刊詩篇、評論で全集に近い大作になりました。

79年「幻視者」、80年「鳥」、82年「竹垣」、84年「空蟬」を読みますと美しい描写にはっとします。震災後に、私たちがもしかして喪っている感性がないか。我が身を振り返っているところだけに、作者の初期に見る素朴な自然描写やストリートな観察が、震災後に理屈に先走られるフレームは気になりました。作者は、岩手から福島まで太平洋沿岸を歩かれています。私自身、三陸海岸まで遠出



室井大和詩集
新・日本現代詩文庫 155
2021年11月 発刊
土曜美術社出版販売
ISBN-10:4812026628
1,540 円(税込み)

紹介文
齋藤 和子
福島県現代詩人会
相双地区

した情報過多に溺れそうな日記を讀み返す時、生地浪江を書くことと三陸を書くことの落差が大きいことは確かでした。三谷晃一の書く「風土の匂い」を胸に抱くとき、浜には浜の風土がありその匂いや文化への根源的視線を決して離さないつもりで来ましたが、どこか違う表現が震災詩や報道番組に多いのも事実です。一つだけ取り上げますと、作者の震災詩に浜辺の牛が「凶暴」と表現されたことに違和感が残りました。体力も無くぼんやり遠くを見ていたベコのある風景が焼き付いた者には、菓殺出来ないでいた人間とベコたちに凶暴の気力は無かったと思います。また、「ほんとうの空がない」文言には、お天道様と天空だけはいつも清かった私にとつて、希望の否定に感じました。終わりのない^{3・11}。これから向かう自分自身の創作の課題させていただきました。

全体を通して感じたのは、50歳代で亡くなられた妻への悼みと愛情です。妻の喪失が震災の喪失に合流して、作者は次々の旅を志向するのでしようか。旅する心象風景には哀しさがいとも寄り添って見えます。詩集には、深淵を湛える詩心が飛ばした『雪ほたる』が美しく昇華しました。「詩はこころの言葉だ」と明言してくれる詩集になりました。



詩人の仕事
前田 新詩集
2022年8月 発刊
コールサック社
ISBN
978-4-86435-530-8
1,760 円(税込み)

紹介文
斎藤久夫
福島県現代詩人会
前会長(相双地区)

著者十三冊目の詩集(起承転結のごとく「四章」に纏められた)四十六篇の詩を読み進めながら、最後の作品「G線上の詩」に對峙する時、深い感慨にとらわれる。ここに全てが込められている。／私は詩をG線の上だけで書いてきた／恥じらうようにも、おぼろげと告白するにも似て、誇らかに地軸の律動に眩暈(げんうん)めま(い)するうちに、会津盆地を覆う星座の律動に身を任せ、眠りにつく著者の、「詩と詩人の仕事」に通底する「G線の上の旋律の秘密」の顕示は、読む者の心を静かに打つ。／G線とは、ヴァイオリンの四本の弦のうち、最低音の弦である。バッハの『管弦楽組曲第三番ニ長調』の第二曲「エール」を、ヴァイオリン独奏のために、後で編曲された曲が『G線上のアリア』である。／それが私の思想と言うなら／言えなくもないが／「G線上の詩」の最終節にあるフレーズだが、ここには「思想を超える思想」「思想以前の問題」だと言う前田さんの控えめな主張があるように思える。

前田さんから八年ほど遅れて、私は生まれたが、揺れる社会と政治・それらを含め文化であったが、若い者たちに、大きな影響力を持った思想家・詩人がいた。初期評論、新約聖書に基づき語る「関係性」の思想という言葉が、新鮮な話題になった。例えば、私たちが意志して「G線上のアリア」を奏でようとしている、相対的関係性の中では、実は、変わらぬ高音の「E線上のアリア」の演奏でしかないと言うことなのである。

先の前田さんの詩句は、何処かにそんな抽象性を帯びた「関係性」の言葉を胸に浮かべながら、控えめに応えようとしているように思える。「G線の上」というのは、私の思想と言うものではない。「現実(リアル)」なこと、そのものだ」と。

四章(結部)の冒頭に「忘れない」がある。分かりやすい作品であるが、一部だけ手を加えた散文として提示したい。

／私は一九三七年に十月会津(高田)に生まれた／その時父は事故(米俵運搬)で脊髄を挫創して／下半身マヒになっていた／貨車一両を貸し切り／東京帝大の附属病院に入院した／二年半後父が亡くなり／母は、夫の弟と逆縁を結ぶ／義父(叔父)は二年後グアムからニューギニアに転戦し／三月悲惨な戦死を遂げた／私は四月小学校に入學／白木の箱には砂が入っていた／十一月義父の村葬があった／長男の私は父の位牌を持った／満七歳であつた／

おそらく幼子新は父(叔父である)の顔を見ていない。このような現実が、戦中を経験した少なくとも人たちの「G」線の現実である。それから七十七年。美里に、著者は、起承転結、生涯を結んだ。思想ではない、土着の土俗の農の農生活の党の檻樓(らんる)ぼろ(きれ)を背負つての議員の、村落共同体の「G線の上に」、才能(持つて生まれた優れた能力)を標したのだ。

ふたつことない骨太の多くの作品。著者の描写する広大な会津の嶺々、雲、湖、川、流れる霧、雪、月、桜などすべてが深く美しいことに、紙幅が短いので触れることは出来ないが、是非、一読頂きたい詩集である。

シャンソン歌唱 <アトラクション>

かみ お
神 尾 ミ エ 氏 プロフィール

シャンソン歌手 福島市在住
福島シャンソン会会員 かみやま由起氏に師事

詩祭・講演と朗読のつどい 役員・実行委員

詩祭大会	会 長	齋藤 貢	(福島県現代詩人会 会長)
詩祭大会	副会長	岩田 武昭	(同会 理事長)
詩祭大会	実行委員長	あべ 和かこ	(同会理事 担当地区代表)
詩祭大会	事務局長・会計	渡辺 孝行	(同会 事務局長)

福島県現代詩人会 詩祭実行委員

(県北地区会員)

五十嵐定幸
小田 敬二
菊地 清寿
佐藤 公子 (企画)
澤 夏子
鈴木 淑子 (企画)
高木 弘之
高野 良一
高橋 八重子
田中 絹子
丹治 計二
二階堂晃子 (理事)
羽田 真樹
廣川 秋男
油井 憲一

(理事会)

松坂 佳生 (県中)
浜津 澄男 (県中)
渡辺 由和 (県中)
高坂 光憲 (県南)
鈴木 卓哉 (県南)
伊藤 俊晴 (会津)
前田 新 (会津)
みうらひろこ (相双)
齋藤 和子 (相双)
天野 行雄 (いわき)
竹林 征人 (いわき)

福島県現代詩人会の案内

昭和 53 年(1978 年)より活動している文化団体で、福島県内に在住の詩人、及びそれに準ずる詩人の権益を守り、現代詩の普及発展のために協力し、より広い地域の詩人たちとの交流を通して、詩人相互の質の向上並びに親睦をはかることを目的としています。

活動内容

- ・春のアンソロジー発行 (福島県現代詩集)
- ・福島県現代詩集賞運営
- ・秋の詩祭開催 (詩祭・講演と朗読の集い)
- ・年3回の会報発行 (1月、5月、9月)

入会の問い合わせは右のホームページ
または、以下のメールアドレスへ。
ion.iwata@nifty.com (担当:県現代詩人会 岩田)

福島県現代詩人会ホームページ
<http://ion.la.coocan.jp/fpa/>
QR コード

